

本願の仏地

神 戸 和 麿

『教行信証』「後序」に、

慶ばしいかな、心を弘誓の仏地に樹て、念を難思の法海に流す。

(聖典四〇〇頁)

と表白する。

よき人法然に値遇し、『選択集』の書写、またよき人の図画が許され、念仏の僧伽に生きる立脚地を得た仏者親鸞の慶びがよく示されている。

樹心弘誓仏地 流念難思法海

仏地とは凡夫地・菩薩地と区別されるが、ここでは『無量寿経』に基づく「弘誓の仏地」である。世間に埋没している凡夫地を包み如来を出生する大地、本願に生きる道が見出されたことにはかならない。その意味では、仏地は仏である地ではなく、仏を生み出す大地、群萌を仏にする弘願の一乗海といえる。その如来を出生する仏地に心を樹て、人間の妄念、妄情、あるいは不安のこころ、憂慮のこころを仏の法海に流し、仏願に生きよといわれている。

仏者親鸞のよき人との値遇は、

愚禿釈の鸞、建仁辛の酉の曆、雑行を棄てて本願に帰す。

(前同三九九頁)

と表白されている。この回心の表白は『歎異抄』でいえば、

親鸞におきては、ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひとのおおせをかぶりて、信するほかに別の子細なきなり。

(前同六二七頁)

と言う。「親鸞におきては、ただ念仏して……信する」という信念の表白は、「棄雑行兮帰本願」ということである。その宗教的信念、「ただ念仏して」というわが信念は、人生の歩み、風や、嵐の中で樹木が揺らぎつつも、枝、葉を伸ばしていく大地の中でなかで育つ根、大地の感覚といえるだろう。親鸞はみずからの人生、歩みの中で常にこの言葉を憶念した。それ故に、本願の仏地、選択本願の値遇を「これ専念正業の徳なり、これ決定往生の徴なり。仍て悲喜の涙を抑えて由来の縁を註す」(後序・前同四〇〇頁)と深い感慨と謝念によって註す。

本願の仏地、念仏に生きる信念とは、通仏教の凡夫地・菩薩地・仏地という人間からの段階的な、仏になる進趣を目的とした行ではない。凡聖自力の行を転じた不回向の行である。つまり、如来回向の行信、目覚めのことである。

「大小聖人・重軽の悪人、みな同じく齊しく選択の大宝海に帰して、念仏成仏すべし」(「行巻」・前同二八九頁)、いかなる人も、またどんな状況にあつても貴賤、男女の選びなく、一如の願心、平等の慈悲に目覚め、歩むことのできる道である。

その如来の行、一如の願心の憶念を『選択集』の末尾には、次のように比喩的に表現する。

念仏の行、水月を感じて、しかも昇降を得たり。

(真全一・九九三頁)

人間からの行、自力心にてさとりを月を得ようとするのでなく、一如の月を得ようとすれば水を澄ませ、南無の大地に帰せよという。水を澄ませばおのずと、如来、一如の願心、阿弥陀の月は求めずとも宿業の大地、わが身の

水面に宿ると、南無阿弥陀仏の目覚め、本願を憶念する道を語る。

二

法然の仏道観、本願の自証は次のように表白される。

弥陀如来、法蔵比丘の昔、平等の慈悲に催されて、あまねく一切を摂せんがために、造像起塔等の諸行をもって、往生の本願としたまわず。ただ称名念仏の一行をもつて、その本願としたまへり。
(真全一・九四五頁)

その道とは、釈尊の正覚、仏の自内証を理想とする自力の成仏道ではない。法然の選択本願を立脚地とした念仏往生の道である。末法の世、時機の自覚において、釈尊の正覚を人間行、自力行にて求めるあり方が、全く転換したところの仏事にほかならない。

いうまでもなく、仏道の歴史とは釈尊の成道（正覚）に始まる。釈尊、仏の如くならうとする歩みである。しかし、その歩み、修道史は正像末の三時史観として内観される。末法の世、法蔵は「世すでに末法になり、人みな悪人なり」(念仏往生要義抄「法全六八一頁」と言われ、また、『法然上人説法事』には、

しかればかの諸宗は、いまのときにおいて機と教と相応せず、教はふかし、機はあざし、教はひろくして機はせばきがゆえなり。
(法全一七三頁)

と、機教不相応がいわれている。

そのような中、法然は「一心専念弥陀名号、行住座臥不問時節久近、念念不捨者、是名正定之業、順彼仏願故」(散善義・真全一・五三七頁)の一文に開眼し、本願の仏地に立つ一道を見出すのである。

法然の仏事、念仏をわが信念とした仏法興隆は、全く今までの仏道を見直すことになる。釈尊の成道、聖なる仏地は、十信・十住・十行・十回向・十地・等覺・妙覺への歩み、修道史である。しかし、その道は、一仏乗を法印とし

ながらも、修道の外に生きる十悪・五逆・謗法・一闍提の衆生を救われざる人びととして全く疎外し、見棄ててきたといえる。

その仏道の修道史そのものが見直されるところに法然の仏道の事業、真宗興隆はあったといつてよい。『三心料簡 および御法語』によれば、

聖道門は智慧を極めて生死を離る、浄土門は愚癡に還えりて極楽に生る。

と言う。人間の思案にては到底考えられない仏道の知見といえるだろう。

仏陀を理想の聖者として、仏陀の如く断惑証理を歩む道とは、無明の覆いにある人間存在から仏性、「淨体」(「玄義分・真全一・四四二頁」)を磨きだしていくことである。みずからの力、人間の内在的行為によつて「智慧」を極め仏性を開發していく道である。しかし、法然の炯眼に見据えられた浄土門、往生浄土の道は「愚癡に還えりて」と押えられる。その道は修行のできる聖人も、日々が生活に追われて修行の暇もない凡夫人も、人が生きるといふことは誰しもが「流転」、三界内の生活者であり、「煩惱」具足の身の事実を生きているということである。そして、その「身」の事実への凝視は、人のいろいろの職業の異なり、あるいは生活の違い、つまり、民衆(群萌)の生活のところに、仏道の門が問い直されることになる。

その点を法然の法語の文に二、三尋ねてみると、

むまれてより仏性のまなこしひて、善のたねをうしなへる、闍提人のともがらなり。

(鎌倉の二位の禪尼へ進する御返事) 法全五二九頁)

つぶさに十悪五逆四重謗法闍提破戒破見等のつみをつくりて、いまだ除尽する事あたはず。

(「三部經大意」法全三七頁)

先づ罪悪生死の凡夫、曠劫より已來、出離の縁ある事なしと信ぜよと云へる、是即断善の闍提の如きものなり。

と一言言葉が数多い。

(前同三六頁)

かように法然の仏道観は、十悪・五逆・謗法・断善の闡提という聖なる仏地から除かれた人びとを凝視する。「愚癡に還えりて」とは、自身の内観であるが、そこには十悪・五逆・謗法・闡提の人びとをみつめた言葉である。法然の仏道とは、聖なる超越界へ歩む人間、凡夫を否定超克していく行位に対して、どこまでも衆生を煩惱具足の身として荷負する、大地に立つところの仏道といえる。つまり、選択本願の仏道、法然の念仏のわが信念は聖なる超越界にみずから聖者として位置づけていく向上的修道の歩みではなく、最も低い一有情、「愚癡」、群萌の大地のところには仏陀の自内証は何であったのが、仏道の信念の主体として問い直された事業にほかならない。

三

法然の求道、歩みと回心は『和語灯録』によく示される。

およそ仏教おほしといへども、詮ずるところ戒定慧の三字をばすぎず、いはゆる小乗の戒定慧、大乘の戒定慧、顕教の戒定慧、密教の戒定慧なり。しかるにわがこの身は、戒行において一戒をもたもたず、禪定において一もこれをえず、智慧において断惑証果の正智をえず、これにて戒行の人師釈してはいはく、尸羅清浄ならざれば、三昧現前せずといへり。又凡夫の心は物にしたがひてうつりやすし、たとふるにさるのごとし、まさに散乱してうごきやすく、一心しづまりがたし。無漏の正智なに、よりてかおこらんや。もし無漏の智剣なくば、いかでか悪業煩惱のきづなをた、むや。悪業煩惱のきづなをた、ずば、なんぞ生死繫縛の身を解脱する事をえんや。かなしきかなく、いかせんく。こ、にわがごときは、すでに戒定慧の三字のうつは物にあらず、この三字のほかにわが心に相応する法門ありや。わが身にたへたる修行やあると、よろづの智者にもとめ、もろくの学者に

とぶらひふしに、おしふる人もなく、しめすともがらもなし。しかるあひだ、なげきく、経蔵にいたり、かなしみく聖教にむかひて、てづから身づからひらきて見しに、善導和尚の観經の疏にいはいく、一心専念弥陀名号、行住座臥不問時節久近、念念不捨者、是名正定之業、順彼仏願故といふ文を見てのち、われらがごとくの無智の身は、ひとへにこの文をあふぎ、もはらこのことはりをたのみて、念念不捨の称名を修して、決定往生の業因にそなふべし。たゞ善導の遺教を信ずるのみにあらず、又あつく弥陀の弘願に順ぜり。順彼仏願故の文ふかくたましぬにそみ、心にとゞめたる也。

(法全四五九一四六〇頁)

この歩みには、人間の主体、人間のわざにては人間を救うことのできないどんずまりの認識が露わにされている。無漏(出世間)と有漏(世間)、無相と有相、その二極を「未覚」から「覚」への自力意志、人間の主体の選びびにて「断惑証果の正智」を得ようとするのである。しかし、その懸命な三学の努力はいよいよ反極し合い、自身は「三学のうちつは物にあらず」と、みずからの力の空過と徒勞に直面した懺悔の表白となつてゐる。

そして、そこに人間の主体の選び、「未覚」から「覚」への方向でなく、その自力心の選び、主体が雑行と棄てられ、如来選択の願心、名号に随順し、一心帰命していく道が明らかにされている。

一心専念弥陀名号、行住座臥不問時節久近、念念不捨者、是名正定之業、順彼仏願故

その如来選択の名号、念仏のわが信念は、『法然上人伝記』(法然上人伝全集七七四頁)によれば、『観經疏』を二度、三度と読み返すなかに、「乱想の凡夫、称名の行に依つて往生す可きの道理を得」と示されている。法然上人四十三歳の時の回心の表白である。その法然が到達した宗教要求、選択本願の信念は、『選択集』の最後に、その筆致からおよそ二十余年前の時をふりかえりつつ、

ここにおいて貧道、昔この典(『観經疏』)を披閱して、ほは素意を識り、たちどころに余行を捨てて、ここに念仏に歸しぬ。それよりこのかた今日に至るまで、自行化他ただ念仏を繹とす。(真全一・九九三頁)

と、その謝念を記す。

「たちどころに余行を捨てて、ここに念仏に帰しぬ」、この短い文の法然の回心の表白には、三十年間の歩みの悪戦苦闘が凝縮されているといえる。聖なる仏道を理想とした三学、「断惑証果の正智」を目指し、求め歩んだのである。しかし、仏陀の見地を求め至心発願し、戦えども戦えども断ち切れない「生死繫縛の身」、不安、孤独、闇の深さを生きる身、また「煩惱悪業のきづな」、二毒の煩惱から脱出することのできない苦惱、煩惱の身の深さがいよいよ知られてくるのみではなかったのか。

「たちどころに余行を捨てて」という自力無功の深信は、戦っても戦っても断ち切れない邪見憍慢の根の深さ、闇の深さ、自身の信知にある。満之の表白でいえば、「自力の無功なることを信ずるには、私の智慧や思案の有り丈を尽して、其の頭の挙げやうのない様になると云ふことが必要である。此が甚だ骨の折れた仕事でありました」（「わが信念」清沢満之全集六・二二九頁）と言う。戦い矢折れ力尽きるのであって、戦わずして刀折れ矢尽きるのではない。人間の精神のあり様は、親鸞が帰本願の信念に生きる中に三願転入の文を表白する如く、私たち人間のうぬぼれ、上下、優劣、差別のこころの自力心は人間の力から出ることのできない根の深さである。その身が信知され、懺悔されたのである。

法然の「たちどころに余行を捨てて、ここに念仏に帰しぬ」という回心、わが信念は、あたかも羽毛が空高く飛翔して、はてしない旅路のすえに、やがて大地に舞い戻るように戦い破れ愚身の大地に還えり、落在したのである。この表白は、『選択集』製作の六十代の頃である。静かにしかも強靱に生きていかれる心境からの回想といえる。

法然の仏道は本願の仏地に立つところにある。仏智に照らされ、仏智にわが身が掘り下げられ如来の清浄願往生心に目覚めて生きる道である。この世を生きる衆生、誰しもが絶対に避けることのできない「不出火宅」、「罪悪生死の凡夫」という身の事実、宿業の大地に、釈迦の発遣を通して弥陀の名号、招喚を信知して、新しい主体に覚醒し歩む

道である。

四

法然の選択本願の仏道とは、「三経一論」を宗要とし、ことに善導の釈義による二尊教である。

釈迦、一切の凡夫を指勸して、この一身を尽くして、専念専修して、捨命已後、定んでかの国に生るれば、即ち十方の諸仏、ことごとくみな同じく讚め、同じく勧め、同じく証したまう。何をもつてのゆえに、同体の大悲なるがゆえに。一仏の所化は、即ち一切仏の化なり。一切仏の化は、即ちこれ一仏の所化なり。

〔二心章〕真全一・九六一—九六二頁)

十方におのおの恒河沙等の諸仏ましまして、同じく、釈迦、よく五濁惡時・惡世界・惡衆生・惡見・惡煩惱・惡邪・無信の盛りなるときにおいて、弥陀の名号を指讚して、衆生を勸励せしめて、称念すれば、かならず往生を得と讚じたまう。(前同・九六二頁)

と言われている。釈迦(指勸)の教を通して弥陀(指讚)の法、名号に目覚めて生きよという、二尊教である。釈迦はどこまでも私たちの世、歴史内部の五濁、惡衆生、惡邪、無信の盛なる宿業の大地に立ち、「一身を尽くし」、「同体の大悲」をもって、衆生の帰する阿弥陀の法を「指勸」、「指讚」してくださったのである。

仏の名号を称せよという行の選びは、人間からの孝養父母等、また六波羅蜜の行とは全く質を異にする。

『選択集』『本願章』には「弥陀如来、余行をもって往生の本願としたまはず。ただ念仏をもって往生の本願としたまへるの文」(前同・九四〇頁)と標挙して、続いて、善導の「加減の文」を引証する。

もしわれ成仏せんに、十方の衆生、わが名号を称せんこと、下十声に至るまで、もし生ぜずは正覚を取らじ。かの仏、今現在して成仏したまえり。まさに知るべし、本誓重願虚しからざること。衆生称念すればかならず往

生を得。

(前同)

仏心が衆生を包んで仏心を成就する本願は名号を体として「本誓重願虚しからず」とはたらく。仏道の根本を明らかにする了解である。つまり、仏の名号を称せよ(称我名号)という行の選びは、人間の行(諸行)と選んだ[〃]はじめに名号あり[〃]という、一如の願心を衆生の命の根元に呼びさます真理のはたらきである。その呼びかけを聞く一念とは、人間の分別心、自力心が転ずるのである。

その本願の名のり、名号は、「かの仏、今現在して成仏したまえり。まさに知るべし、本誓重願虚しからざること。衆生称念すればかならず往生を得」という、仏の衆生を包んだ本願の成就、本願の虚しからざること誓う、一念の発起、目覚めである。『歎異抄』でいえば、「念仏もうさんとおもいたつ」(聖典六二六頁)初一念に、名号は人間の無明、自力の心を破り、いかに深く煩惱に覆われた身をも一如、大悲の願心に目覚ましめるのである。「罪悪深重煩惱熾盛の衆生をたすけんがための願にてまします」と、自我と妄執に重く、そして深く閉ざされた衆生を一念、一念に一如の願心、新しい命、新しい主体に目覚ましめ、歩ませるのである。

長く仏道は、一如を究極点とした人間からの理想、目的として求められてきた。資糧位・加行位・通達位・修習位・究竟位、そして妙覚に到る道としての従因向果の歩みであった。その仏道の転回点が、「本願章」では「総の四弘誓願」、度・断・知・証の道に対して、「四十八願は弥陀の別願」という内容で示される。総とは一如を究極点とした衆生から仏への道である。別とは一如を究極点とするのではなく、仏から衆生への道(従果向因)のことである。従如来生、衆生を包んだ一如、一如が大悲の誓願として出発点となるのである。一如、大悲の願心が衆生の命の脚下に來ているということである。仏心が衆生を包み仏心を成就しようと大悲誓願する、その一如の願心が出発点となるのところにこそ、本願の仏道はある。

「本願章」では、続いて、

なながゆえぞ、第十八の願に、一切の諸行を選び捨て、ただひとへに念仏の二行を選び取りて、往生の本願と
したまうや。
(真全一・九四三頁)

と問い尋ねる。

答えていわく、聖意測りがたし、たやすく解するにあたわず。しかりといえども、いま試みに二義をもつてこれ
を解せば、一には勝劣の義、二には難易の義なり。
(前同)

と、一切諸行の選捨と念仏一行の選取が、人間の知を超えて「聖意測りがたし」と言われる。つまり、一如の願心、
仏の超越的な自内証が仏智不思議のはたらきであることが思念されている。そして、念仏一行の選取が勝劣の義、難
易の義によって了解される。

はじめの勝劣の義については、

念仏はこれ勝、余行はこれ劣なり。ゆえんはいかん。名号はこれ万徳の帰するところなり。
(前同)

と言ひ、次に難易の義については、

念仏は修し易く、諸行は修し難し。
(前同九四四頁)

と示し、その理由を、

いまし衆生障重くして、境は細なり、心は麁なり、識^{あか}颯り、神^{じん}飛びて、観成就しがたきに由つてなり。(中略)
かるがゆえに知りぬ、念仏は易きがゆえに一切に通じ、諸行は難きがゆえに諸機に通ぜざること。
(前同)

と言うように説明を要しない論理の運び方である。

そして、「名号はこれ万徳の帰するところなり」ということが、次のようにいわれている。

ゆえんはいかん。名号はこれ万徳の帰するところなり。しかればすなわち、弥陀一仏の所有の四智・三身・十
力・四無畏等の一切の内証の功德、相好・光明・説法・利生等の一切の外用の功德、みなことごとく阿弥陀仏の

名号のなかに撰在す。ゆえに名号の功德、もつとも勝れたりとす。

(前同九四三―九四四頁)

そこには仏の自内証が名号の功德として衆生の上に現前してくる内容が押えられている。また『三部経大意』にも同じように、

華嚴の三無差別、般若の尺淨虚融、法華の実相真如、涅槃の悉有仏性、たれか信ぜざらむ、是も仏説なり、彼仏説也。何をか信じ、何をか信ぜざらむや。夫三字の名号は少しと云へども、如来の所有の内証外用の功德、万徳恒沙の甚深の法門を此の名号の中にをさまれる、誰か是を量るべき。

(法全三三八頁)

と言われる。ここでは『華嚴経』、『般若経』、『法華経』、『涅槃経』に表現される仏の自内証を示しつつ、そのことが名号の功德として、衆生の上にとどのように功用するのか。ここでも『選択集』と同じように如来の「内証外用」のはたらきとして押えられている。いま、これらの文によって留意されることは、弥陀の名号は如来所有の「内証外用」のはたらきであるということである。それは先に尋ねたように釈尊の覚り、一如を究極点として「未覚」から「覚」へ行修していく「断惑証理」の仏道志向とは、全く質を異にした自覚内容である。つまり、阿弥陀の証り、正覚心は、光明の縁、名号の因によって、外に迷い出た無明の衆生を遍照し、内に大悲撰取し、目覚ましめる衆生への名のりである。その名号の功德、如来の「内証外用」のところに、法然の独自の名号了解が示されていないだろうか。

長く仏道は、無漏(出世間)と有漏(世間)、無相と有相の關係を自力の行証によって統合、統一していく「断惑証理」の道の歩みである。いい換えれば、「断惑」の後に「証理」(外証)を得ようとする息慮凝心、廢悪修善の行であったといえる。それに対して、如来の名号、「内証外用」のはたらきは、光明の縁において十方衆生を内に撰取し、名号の因に依つて一如の願心に覚知せよと、私たち衆生を如来の願心、本来のいのちの家郷に目覚ましめるのである。

弥陀善逝平等の慈悲にもよをされて、十方衆生にあまねく光明をてらして、^{うた}転一切衆生にことごとく縁をむすばしめむがために、光明無量の願をたてたまへり、第十二の願これなり。つぎに名号をもて因として、衆生を引

撰せむがために、念仏往生の願をたてたまへり。第十八の願これなり。その名を往生の因としたまへることを、一切衆生にあまねくきかしめむがために諸仏称揚の願をたてたまへり、第十七の願これなり。このゆへに釈迦如来のこの土にしてきたたまふがごとく、十方におの／＼恒河沙の仏ましく／＼て、おなじくこれをしめしたまへるなり。しかれば光明の縁あまねく十方世界をてらしてもらすことなく、名号の因は十方諸仏称賛したまひてきこへずといふことなし。(中略) しかればすなわち、光明の縁と名号の因と和合せば、撰取不捨の益をかぶらむことうたがふべからず。(中略) 又このぐわんひさしくして衆生を濟度せむがために寿命無量の願をたてたまへり、第十三の願これなり。(『三部経大意』真全一・七八四頁)

長く仏道は釈尊の寛りを特別な事柄とし、人間の能力を規準として十地、五位の段階によって求められてきた。しかし、いま二尊教においては釈尊を釈尊たらしめた根源が推究されたのである。世間に埋没している凡夫地を包み、如来を出生する大地、本願の仏道が明らかにされてきたといえる。

第十二・光明無量の願、第十三・寿命無量の願の阿弥陀の証りは、釈尊を超え十方衆生を包む証りであり、はたらし、行である。光明無量、「わが光無量ならん」とは衆生の闇の深さを照らし、衆生の闇を包み破るはたらきである。寿命無量、「わが寿命無量ならん」とは衆生の流転の長さを包み、衆生に埋没している法身の主体、眞実の命を呼び覚ますはたらきといえる。その阿弥陀の行は、第十七・諸仏称名の願、十方諸仏に讃嘆されたいという名号、第十八・念仏往生の願、念仏の目覚めの信、行信の道である。そのように光明・名号の因縁、行信の目覚めに「念仏衆生、撰取不捨」の利益にあずかる往生道が教示されている。

五

『大経釈』には、阿弥陀仏の選択の行、名号の徳を、勝劣・難易の二義によって積したあと、

一月の、万水に浮いて、水の浅深を嫌うことなきがごとし、太陽、世界を照らして、地の高低を選ばざるがごとし、(中略)、万機を一願に撰し、千品を十念に納む。この平等の慈悲をもってあまねく一切を撰するなり。

(真全四・二七〇頁)

阿弥陀仏の光明、寿命のはたらきは、月が水に映るように「水の浅深」を嫌うことがない。また太陽がこの世を照らし、すべての命を育むように「地の高低」を選ばない。いまこの世を超えた如来の無碍なる智慧と平等の慈悲は、名号の呼びかけをもって、私たち衆生の賢愚、善悪、出家・在家のあり方を選ばず大悲撰取するはたらきであると語る。それ故に「本願章」には、

弥陀如来、法蔵比丘の昔、平等の慈悲に催されて、あまねく一切を撰せんがために、造像起塔等の諸行をもって、往生の本願としたまわず。ただ称名念仏の一行をもって、その本願となしたまへり。

(真全一・九四五頁)

と示される。当時仏道から疎外されていた貧窮困乏、愚鈍下智、少聞少見、破戒無戒の人びとが称名念仏の一行、光明・名号のはたらきに目覚め救済されていく道である。かように法蔵菩薩の選択である念仏の名号は、上・中・下の区別なく九品を平等に一如、無漏の報土に入らしむる道、「極悪最下の人のために、しかも極善最上の法を説く」(讚歎念仏章)前同九七三頁)という仏道の顕揚である。

無碍なる智慧と平等の慈悲をもってすべての人呼び覚ます名号は、私たちの深い自我執着の心、自己肯定の心、自力の差別心を照破し、如来の願心、ひとの命の根底に如来の清淨意欲、清淨願心呼び起こしてくるのである。

『選択集』『三心章』には「念仏の行者、必ず三心を具足すべし」(前同九五七頁)と示し、『観経』の三心、それを釈した善導の「散善義」、『往生礼讚』を引用して、法然の私釈が施されている。

もし衆生ありて、かの国に生まれんと願ざれば、三種の心を発してすなわち往生す。何等をか三つとする。一つには至誠心、二つには深心、三つには回向発願心なり。

(『観経』聖典一一二頁)

と、一者至誠心、二者深心、三者回向發願心と願生者の宗教的要求、三心が示されている。『觀經疏』の了解によれば、その三心とは人間の心、心理状態をいうのではない。仏の問いに仏みずから徴すという、仏問仏答の形によつて人間の宗教心、菩提心が掘り起こされてくるのである。人間の自力心を転じて仏智の深広性のなかにある法蔵の願心、如来の清淨意欲、清淨願往生心が掘りあてられてくるのである。三心とは、人間心に即して人間心を超え、自力心を転ずる法蔵の願心が自身に深信の心として明らかにされてくることである。

「散善義」三心積の結文には、「この三心は定善の義を通摂す」（真全一・五四一頁）といわれるように三心は念仏のみならず定善・散善を包んでいる。また法然は「三心章」の私釈に、「この三心は総じてしかもこれをいえば、諸行の法に通じ、別してしかもこれをいえば、往生の行にあり。いま、通を挙げて別を摂す。意、すなわち周し」（前同九六七頁）と言う。「諸行の法」とは、人間の自力心、定散諸行のことであり、「往生の行」とは仏願に順ずる称名正定業のことである。そして、そのことが「いま、通を挙げて別を摂す」といわれるように、人間心に即して人間心を超えた如来心、如来の願心の目覚め、覚知が明らかにされてくるのである。

至誠心積では、

一には至誠心なり。至は真なり、誠は実なり。一切衆生の身口意業の所修の解行、必ず真実心中に作すべきことを明かさんと欲す。外に賢善精進の相を現じ、内に虚仮を懐くことを得ざれ。（『浄土宗全書』一一・五五頁）

と言われる。仏弟子、願生者が至誠心を備えることによつて如来の真実心に至ろうとするのである。一如を究極点として仏の心に賢善精進の相を現じて、みずからに虚仮を懐くことのない生活者たろうとするのである。その道の歩みを通して内観されてきたわが身の事実が、「内懐虚仮」の悲歎である。自己固執の心（我癡・我愛・我慢・我見）を離れ出ようとするのであるが、自己固執の心から一步も出ることのできない懺悔、悲歎である。人間の自力心、息慮凝心の定善、廢惡修善の散善をもつて、貪瞋煩惱を断じ真実心を得ようとしていくなかに、僥慢、うぬぼれ、邪見の

断ち難い根の深さ、虚仮の行、雑毒の善の身を生きていることが知られてくるのである。宗祖は「不得外現賢善精進之相、内懷虚仮」の文を「外に賢善精進の相を現ずることを得ざれ、内に虚仮を懷けばなり」と、悲歎する。宗祖の心を一貫しているのは自力の執心、自己固執の心から脱することのできない悲歎の身、懺悔である。『正像末和讃』には、「浄土真宗に帰すれども 真実の心はありがたし 虚仮不実のわが身にて 清浄の心もさらになし」（聖典五〇八頁）と述懐する。

そして、『大経』の勝行段によって、法蔵菩薩の浄土建立の菩薩行を示し、如来の真実心の何たるかが釈意される。「何をもつてのゆえに、まさしく彼の阿弥陀仏の因中に菩薩の行を行じたまいし時に、ないし一念一刹那も、三業の所修、皆これ真実心の中に作したまいしに由つてなり」（散善義「前同五三三頁」と示される）。

私たちに如来の真実心が自証される道は、阿弥陀仏因中の真実心の作す行、従如来生の、法蔵菩薩の行である。自力心によって一如を究極点とするのではなく、一如が衆生を包み仏心を成就しようと衆生の脚下にはたらく行である。一如は私より近い、分別以前である。私の分別を超え包む生命の出発点である。いい換えれば、南無阿弥陀仏の名号とは、私たちの命の根底に埋没し内蔵している「心中所欲の願」（本願章）所引『大阿弥陀経』前同九四一頁）が選択され、見出されたのである。私たちの命の根底に埋没している法蔵菩薩の行とは、「仮令身止 諸苦毒中 我行精進 忍終不悔」（無量寿経）聖典一三頁）と、私たちの三毒、そして闇を包み、宿業のところにはたらく行である。私たちが日々の生活は不安、闇、煩惱のものがき、不平不満の暗い愚癡のなかにあるが、法蔵菩薩の修行は、その闇をひと時、ひと時が如来の欲生心、私たちの身心を自在ならしめんとする如来の清浄意欲のはたらきを拝め、帰命せよと勅命し、呼ぶのである。如来が法蔵となり給うた因位とは、衆生の全面的な闇の領域を包むのである。一如の光が闇を担う願心となり、私たちの宿業の大地のところに真実の命、真実の主体を回復し、呼び覚ますはたらきであるといえる。

一つには決定して深く、「自身は現にこれ罪悪生死の凡夫、曠劫より已来、常に没し常に流転して、出離の縁あ

ることなし」と信ず。

二つには決定して深く、「かの阿弥陀仏の四十八願は衆生を摂受して、疑いなく慮なくかの願力に乗じて、定んで往生を得」と信ず。
(「三心章」真全一・九五九頁)

如来の眞実心を成就してくだされた行が人間の迷い、流転の地底、「罪悪生死の凡夫」の身を包み、「乗彼願力」の往生浄土、仏願に乗託し、往生道、涅槃道に立つ命、新しき主体を獲得するのである。

その道は、人間からの自力、従因向果の行、断惑証理の歩みではない。迷い（流転）の因果を転じて覚り（還滅）の因果に至る迷・悟の道ではない。阿弥陀の仏願力に乗ずる道である。「彼に喚び、此に遣わす」（玄義分）前同四四三頁）、二尊教の道である。その二尊教とは従果向因の仏道である。「阿弥陀仏の因中に菩薩の行を行じたまひし時」と言われるように、如来が法蔵菩薩となつた如来の願心に目覚めるか、否かの信・疑こそ問題となる。

いい換えれば、釈尊の成道（覚り）を中心とした自力の「迷・悟」の因果論、「断惑証理」の道を超えて、阿弥陀仏、光明・名号の「内証外用」の功用により、仏願力に乗じていく、法蔵の願心、はたらきに目覚めるか、否かの「信・疑」こそ、仏道了解の大切な鍵となる。法然は二種深信を、私積に、

生死の家には疑をもつて所止となし、涅槃の城には信をもつて能入となす。ゆえにいま二種の信心を建立して、九品の往生を決定するものなり。
(「三心章」前同九七六頁)

と了解する。眞実信心の目覚めは、生死、流転の時の中にあつて、流転の時を超えて涅槃道を得るのである。如来の撰取して捨てない大悲不捨の願心、大悲不捨の願心に立つが故に、私たちの生活は、煩惱のものがき、不安のなかに入りつつも、不安、煩惱からの解放の進行中の無上涅槃に立つ道を得るのである。

以上、尋ねてきたように法然の仏道課題は、

天台、眞言、みな頓教と名づくといえども、しかればかれは断惑証理なるがゆえになおこれ漸教なり。いまだ惑

を断ぜざる凡夫、ただちに三界の長迷を出過するを明かすことは、ひとえにこの教（大経）なり。ゆえに、この教をもって、頓中の頓とするなり。

〔大経釈〕法全六八頁

と、『無量寿経』の值遇にすべての人の救済の道、仏道の自証、知見を明らかにする。

それは長い聖道の「歴劫迂廻之行」（真全一・九三二頁）を超えでるところの道であり、

それ速やかに生死を離れんと欲わば、二種の勝法の中に、しばらく聖道門を闊きて、選びて浄土門に入れ。浄土門に入らんと欲わば、正雜二行の中、しばらくもろもろの雜行を抛ちて、選びて正行に歸すべし。正行を修せんと欲わば、正助二業の中に、なお助業を傍にして、選びて正定を専らすべし。正定の業とは、すなわちこれ仏の名を称するなり。称名は必ず生まるることを得、仏の本願に依るがゆえに、と。

（聖典一八九）

と示される。

その仏道開頭は、

仏教に隨順するといふは、釈尊の御おしへにしたがひ、仏願に隨順するといふは、弥陀の願にしたがふ也。仏意に隨順すといふは、二尊の御心になふなり。

〔往生大要鈔〕法全六一―六三頁

という、二尊教の道である。親鸞は、そのよき人の仰せを本願の仏地として、浄土真宗開頭の仏事に生きていくのである。

出典は次の通り略記した

・ 真宗聖典 ↓ 聖典

・ 真宗聖教全書 ↓ 真全

・ 法然上人全集 ↓ 法全